

# 能登 続く断水 長引く避難

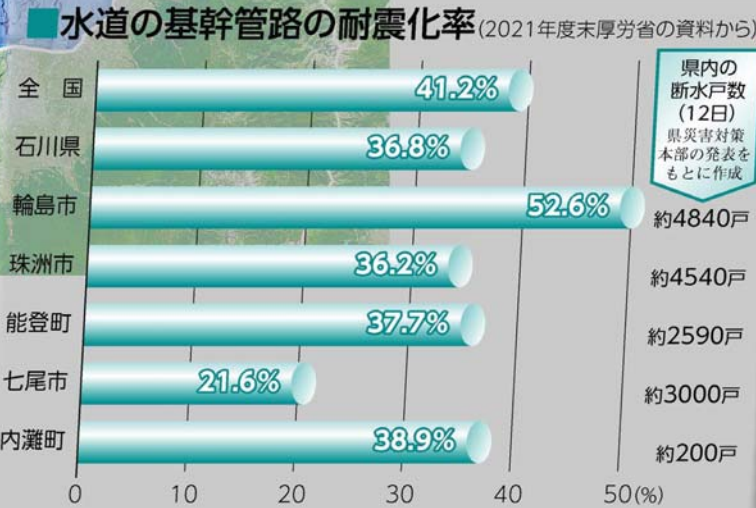
北陸地方に大きな被害をもたらした能登半島地震は、元日の発災から2カ月半が経過しました。激震とともに津波、火災、地盤の液状化、土砂崩れが発生し、石川県内だけで死者241人(災害関連死15人を含む)、住宅被害(全半壊、一部損壊)は8万棟を超えました。水道の復旧や建物の公費解体、がれきの撤去が遅れ、ボランティアの人手も足りていません。(丹田智之)

# 復旧遅々



④ 火災で焼失した朝市通り周辺 = 1月14日、石川県輪島市

⑤ 多くの家屋が倒壊した住宅街  
⑥ 漏水箇所での作業状況を確認する名古屋市上下水道局の職員 (左側) = 2月29日、珠洲市



## 水道管耐震化 3割台にとどまる

日本海に突き出た能登半島は、約100kmの長さがあります。被災直後に各地で主要道路が寸断し、物資の輸送やインフラの復旧をはじめとする救援活動は困難な状況が続きました。

3月中旬の時点で石川県内の避難所には約4800人が身を寄せ、約4200人がホテルや旅館などで2次避難を続けています。行政の支援が届かない自主避難所では、被災者が協力しあって人数分の支援物資を取りに行くなどしています。

避難生活が長期化している要因の一つが断水です。国の資料によると、水道管の基本的な施設である基幹管路が斜面崩壊による流出や非耐震管の被害が多く発生しました。基幹管路の耐震化は全国平均

が41.2%に対し、石川県では36.8%にとどまっています。

12日現在で奥能登の輪島市、珠洲市、能登町を中心に3市2町で約1万5170戸が断水しています。

被災直後は孤立状態だった珠洲市馬縹町の平田天秋さん(78)は、避難生活の困りごとについて「水やね、トイレや風呂が使えず、復旧のめども分からない」と疲れた表情で語りました。馬縹町では周辺の浄水場が被災し、水道復旧は4月以降になる見通しです。

同市内では、名古屋市上下水道局の職員や提携する業者が漏水箇所の修繕を進めています。「道路の状態が悪く、がれきも散乱している。土砂が崩れた場所もあり、厳しい環境で作業している」(担当者)といいます。



被災した家屋の解体も遅れています。奥能登地域では危険な家屋等の緊急公費解体が行われていますが、多くの建物は被災直後と変わらない状態です。公費解体の手続きに必要な罹災証明書の発行が遅れ、専門業者などの人手が足りないことも要因として指摘

されています。県が被災地への「不要不急の移動」を自粛するように呼びかけたことも影響し、ボランティアも不足しています。県災害対策本部の発表(12日)では、ボランティアに登録した約2万5700人のうち、これまでに活動したのは延べ8911

人。同時期の1日あたりの活動人員は、県全体で370人ほどです。家具などの片づけが進まず、がれきを災害ごみ集積所まで運べない高齢者が取り残されるおそれがあります。

被災地では応急仮設住宅の建設工事が進んでいますが、能登半島は平たんな土地が限られ、用地の確保が課題になっています。3月に入った時点で入居申請は7000件を超えています。着工数は4345戸にとどまっています。

珠洲市正院町の向平耀子さん(87)は、仮設住宅の入居を申し込んで「落選」が続いたといいます。自宅は地震で傾きました。壊れた壁の隙間から

雨や風が入り、罹災証明で「全壊」と判定されました。寒い夜に仮設トイレを使うのが苦痛で「いつまでも避難所にいたくない」と話しています。



## 足りない人手 公費解体も仮設建設も進まず